

【解説】

第1問 世界史上の危機

A

リード文で述べられている唐代の社会変動については P. 120 の¹が重要。P. 29 には、後に藩鎮となる節度使の位置も示されている。P. 27 で地図上に示されている都護府との違いについては、P. 120 右下のチェックが参考になる。唐後期の財政を支える一方、その滅亡の一因にもなった塩の専売については、P. 120 にコラムがある。

問1 正解④ (唐末期の状況) ¹

P. 120 の¹にあるように、唐滅亡の契機となったのは黄巢の乱である。唐を滅ぼした節度使である朱全忠については、P. 116 の¹を参照。P. 120 の⁴にあるように、彼は華北で興亡する「五代」の端緒となった後梁の建国者でもある。後梁以外では、燕雲十六州割譲との関連で、後晋にも注意したい。

呉楚七国の乱は、中央集権強化に伴って領土を削減された諸侯王による漢代の反乱である。反乱に加わった諸侯王は、P. 110 の地図^Aで確認できる。背景となった秦・漢の統治制度の違いについては、P. 110 の²にまとめた。黄巾の乱の指導者である張角については、P. 112 を参照。張角の率いた太平道は道教の源流思想としても重要である。

問2 正解③ (世界史上の危機) ²

① 羈縻政策と冊封をもって周辺の異民族を統御した唐代前期と対照的に、宋代の中国はしばしば北方民族から圧迫をうけた。P. 153 の³で、澶淵の盟や慶暦の和約、紹興の和議などについて整理したい。P. 152 の地図^Bでは、金による開封占領や臨安への遷都が確認できる。

② 世界恐慌の要因については P. 276 の¹を参照。恐慌以前のアメリカの繁栄については、P. 270・271 で整理した。

③ P. 302・303 で、中東戦争を含めパレスチナ問題についてまとめている。P. 302 の地図^Cで示したように、イスラエルがシナイ半島を占領したのは第3次中東戦争である。P. 302 の¹にあるように、その後シナイ半島は、1979 年のエジプト=

イスラエル平和条約調印をへて、1982年にエジプトに全面返還された。

- ④ チェルノブイリ原子力発電所事故については、P. 310 を参照。この事故を契機として、ゴルバチョフのもとでグラスノスチが進められたことに注意したい。

問 3 正解② (唐の税制) 3

- a P. 120 の 1にあるように、両税法は、楊炎の建議に基づいて租調庸制にかわる税制として導入された。P. 120 の 2には租調庸制との相違点をまとめている。
- b 司馬光は宋代の宰相で、富国強兵を目指した王安石の新法に対し、地主の立場から反対した。P. 153 の 2では、二人の略伝をまとめた。王安石による政治改革の詳細やその背景についても、P. 153 の 2に整理してある。

B

リード文にある東南アジアの植民地化については、P. 246・247 で確認できる。関税引き上げ等による経済ブロックの形成については、P. 276 の³を参照。

問 4 正解② (東南アジアの歴史) ⁴

- a P. 102 の¹にあるように、ラタナコーシン朝は 1782 年に成立した。P. 246 の地図^Bでは、その領土も確認できる。
- b P. 298 の²にあるように、インドネシア初代大統領がスカルノ、スカルノ失脚後の 1968 年大統領に就任したのがスハルトである。
- c 東南アジア諸国における民族運動についてまとめた P. 273 の⁶にあるように、インドシナ共産党の成立は 1930 年である。宗主国に対して始まった民族運動が、日本軍侵攻によって抗日運動に変化していくことを押さえない。19 世紀末の民族運動については、P. 247 も参照。ホセ=リサールやアギナルドはこちらで紹介している。

問 5 正解④ (ジャワの歴史と文化) ⁵

- ① モンゴル帝国による対外遠征については、P. 163 の地図^Cで整理している。ジャワのように、モンゴルによる遠征は失敗に終わったものも多いが、東南アジアに大きな影響を与えたことも確かである。遠征後の東南アジアについては、P. 102 を参照。遠征の年代や当時のハンについても、P. 162 の¹や地図^Aで確認したい。
- ② P. 168 の¹にあるように、1619 年オランダは、ジャワにバタヴィア市を建設した。バタヴィア建設については、P. 47 や P. 210 の¹なども参照。
- ③ P. 100 の²で写真とともに紹介したように、東南アジアでは『マハーバーラタ』や『ラーマーヤナ』を題材としたワヤンと呼ばれる影絵芝居が発達した。ワヤンの発達については、P. 102 の²も重要である。東南アジア文化がインドの影響を受け、その消化の過程でワヤンが生まれたことを理解したい。
- ④ P. 102 にあるように、パガン朝はビルマに位置する上座仏教国である。

問 6 正解② (貿易の歴史) ⁶

- a P. 169 の⁴でまとめたように、明への入貢回数は 2 位のチャンパーに大差をつけて琉球が 1 位となっている。

b P. 283 の²にあるように，G A T Tは自由貿易の堅持を目的とする国際経済協定であり，I M F (国際通貨基金)・I B R D (国際復興開発銀行)とともに戦後の経済体制を支えた。G A T T締結の背景には，世界恐慌後のブロック経済構築が，諸国間の経済的対立を激化させ第二次世界大戦の一因となったことに対する反省がある。

C

リード文にある戦間期のヨーロッパの様子については、P. 268 を参照。第二次世界大戦後におけるヨーロッパ統合の歩みについては P. 309 の[2]に詳しい。まずは、E C 発足→加盟国増加→マーストリヒト条約→E U 発足→通貨統合→東欧諸国加盟といった簡単な流れから押さえていきたい。

問 7 正解① (ヨーロッパ統合と西ドイツ) [7]

P. 308 の[1]にあるように、戦後の西ドイツでは、経済復興に尽力したアデナウアーと、冷戦下で東方外交を展開したブラントが重要。コールは、東西ドイツ統一時の西ドイツ首相である。

ヨーロッパ統合については、P. 309 の[2]に示したように、現在の E U の原型が E C S C ・ E E C ・ E U R A T O M にあることを確認したい。ヨーロッパ統合に関しては、当初イギリスが別途 E F T A を結成したことにも注意しよう。

問 8 正解④ (ベルリンの分割占領) [8]

ベルリンの分割占領については、P. 286 の地図[C]を参照。ベルリン同様にドイツも 4 カ国による共同管理とされた点に注意したい。ドイツ全域の分割については、P. 286 の地図[B]を参照。

問 9 正解② (欧州連合における共通通貨の導入) [9]

ユーロについては、P. 309 のコラムを参照。ユーロ導入国は P. 309 の地図[A]で確認できる。イギリスはポンドを用いており、ユーロを導入していないことに注意しよう。

第2問

A

内陸アジアの遊牧民については、P. 156 を参照。P. 157 では、中国における北方民族について紹介している。中国社会の支配層については、後見返し「中国史のまとめ」の[3]でその変遷を確認することができる。

問1 正解① (モンゴル帝国における後継者選出) 10

P. 162 の[1]にあるように、モンゴル帝国では指導者の即位にあたってクリルタイと呼ばれる集会が開かれた。ハイドゥらとの後継者争いを制し国号を元としたのは、フビライである。モンゴル帝国の系図も同ページで確認できる。

中・近世フランスの身分制議会である三部会については、P. 148 の[1]や P. 201 などを参照。後金(後の清)の建国者ヌルハチについては、P. 167 の[5]や P. 170 の[1]を参照。

問2 正解② (漢人社会の歴史) 11

① P. 113 の[1]にあるように、豪族の勢力が強まったのは漢代である。後見返し「中国史のまとめ」の[3]では中国社会の支配層の変遷が確認できる。

② 南北朝時代における漢人の江南移住については、P. 114 の年表の解説でその重要性を強調している。移住の背景には、華北での異民族王朝興亡による混乱があった。漢人移住による江南開発の進展は、隋代の大運河建設につながる。江南開発の歴史については、P. 154 の[3]で整理しておきたい。

③ 宋代には、地主である形勢戸が佃戸と呼ばれる小作人を使役した。P. 153 の[2]で当時の社会構造を確認できる。農地拡大に寄与することとなる、干拓による新田開発については、P. 154 の[2]を参照。

④ 華僑とは中国出身の海外移住者であり、18世紀の人口増大にともない東南アジアなどで増加した。清代の人口動態については P. 172 のコラムを参照。華僑ネットワークの重要性は、19世紀後半におけるアジア内交易の活性化に触れた P. 246 の[2]などでも確認できる。

問3 正解④ (世界史上の有力者層) 12

- a P. 202 の用語解説にあるように、ユンカーとはプロイセンの地主貴族を指す通称である。P. 229 でとりあげた、ドイツ統一の立役者ビスマルクもプロイセン東部のユンカー出身であった。
- b 後見返し「中国史のまとめ」の[3]にあるように、九品中正(九品官人法)の実施で門閥貴族が台頭したのは魏晋南北朝時代である。科挙が定着した明代には、地方社会で郷紳が台頭した。

B

リード文で解説されているグプタ朝崩壊以降のインドについては、P. 98・99 を参照。インドの宗教や哲学については、P. 97 にまとめた。

問 4 正解④ (古代インドにおける身分秩序) 13

P. 97 で、カースト制度の概要を確認できる。カースト制度は、4 身分からなるヴァルナ制に、同職集団を意味する無数のジャーティが結びつき序列化されることで成立した。ヴァイシャ、クシャトリヤはそれぞれ庶民(後に商人)、王侯・武士を指すヴァルナの名である。

問 5 正解② (支配者選出の歴史) 14

- a P. 135 にあるように、東フランク(ドイツ)王国ではカロリング朝の断絶後、諸侯による選挙王政が定着した。
- b P. 149 にあるように、15 世紀以降の神聖ローマ皇帝位はハプスブルク家によって世襲された。近世以降の同家については、P. 198 の 2 を参照。

問 6 正解③ (グプタ朝の文化) 15

- ① P. 99 の 3 で写真とともに紹介しているように、アジャンター石窟寺院にはグプタ様式の仏像・絵画が多数並ぶ。場所は、P. 98 の地図 C などを参照。
- ② P. 98 の 1 にあるように、『ラーマーヤナ』は『マハーバーラタ』とともにグプタ朝期に完成した。
- ③ P. 98 の 1 にあるように、ウパニシャッド哲学が生まれたのは前 7 ～前 6 世紀頃であり、インドに統一王朝ができる前の出来事である。仏教とジャイナ教も同時期に成立した。古代インドの諸宗教・哲学については、P. 97 の 2 で特徴をまとめている。
- ④ P. 98 の 1 にあるように、『シャクンタラー』はグプタ朝期の詩人カーリダーサの手による戯曲である。

C

リード文にあるアメリカ合衆国の奴隷制については、P. 235 の[2]を参照。奴隷解放宣言以降も続く人種差別や第二次世界大戦後の公民権運動については、P. 236 の[3]や P. 307 の[2]で解説している。

問 7 正解① (アメリカ合衆国における奴隷解放) 16

P. 234 の[1]にあるように、『アンクル=トムの小屋』の著者はストウである。P. 235 には『アンクル=トムの小屋』のポスターなどを掲載している。彼女が奴隷制に対して人道的批判を展開したのと並行して、P. 235 の[2]で整理したように、ミズーリ協定やカンザス=ネブラスカ法で奴隷州をめぐる問題が表面化していったことを理解したい。

リンカン大統領が奴隷解放を宣言したことはあまりにも有名だが、必ずしもそれが人道的見地に基づくものではないということに注意する必要がある。P. 235 の人物コラムにあるように、国内および海外からの支持を得て南部とイギリスの結びつきを牽制する意図も大きかった。

ラ=ファイエットはフランスの自由主義貴族である。義勇軍としてアメリカ独立戦争に参加し、フランス革命の際には人権宣言を起草した。詳しくは P. 217 の[3]や P. 218 の[1]を参照。ヘミングウェーはスペイン内戦を背景に『誰がために鐘は鳴る』を執筆したノーベル賞文学者。P. 279 のコラムに登場する。

問 8 正解② (アメリカ合衆国における労働者の歴史) 17

- a ワグナー法とは、ニューディールにおける社会政策の1つで、労働者に団結権・団体交渉権を認めた法律である。ニューディールについては、P. 276 の[2]で整理している。
- b P. 234 の[1]にあるように、アメリカ労働総同盟(AFL)は1886年に結成された。その背景に、南北戦争後に北部で進展した工業化・都市化があることを理解したい。当時のアメリカ合衆国の国内情勢については、P. 236 の[1]で整理している。

問 9 正解② (アメリカ合衆国における女性参政権実現) 18

P. 263 のコラムにあるように、アメリカで女性参政権が認められたのは第一次世界大戦後の1920年である。コラムの年表を見ると、欧米諸国における女性参政権が、

第一次世界大戦ごろから相次いで認められていることがわかる。大戦中に不足しがちな労働力として女性が重宝され、その社会的発言力が増したという経緯があるのはもちろんだが、女性参政権運動の高揚という背景も重要である。

第3問

A

リード文にある近世ヨーロッパの国際関係については、P. 198 を参照。固有名詞は使われていないが、イタリア戦争やウィーン包囲、プレヴェザの海戦、レパントの海戦、オランダ独立戦争などを念頭に置いた記述となっている。事件や戦争など、きっかけとなる出来事を踏まえつつ、ヨーロッパにおける覇権の推移を確認しておこう。

問1 正解③ (16世紀後半のスペイン) 19

P. 196 の①にあるように、1556年に即位したスペイン国王はフェリペ2世である。カルロス1世からスペインなどを相続したフェリペのもと、スペインは「太陽の沈まぬ国」として最盛期を迎えた。

P. 198 の②にあるように、1588年に無敵艦隊を破ったのはイギリスである。スペインは、この無敵艦隊の敗北を契機として衰退し、17世紀にはオランダやイギリス、フランスなどが強勢となる。その過程は、P. 197 や P. 210 に詳しい。

問2 正解① (スペイン内戦) 20

- a P. 279 の③にあるように、ドイツ・イタリアのファシズム2か国が反乱軍側を支援したのに対し、大戦の再発を恐れたフランスはイギリスとともに不干渉政策をとった。1939年、内戦はフランコ率いる反乱軍側の勝利で終結する。
- b aと同じく、P. 279 の③を参照。人民戦線側にはソ連とともに国際義勇軍が援助を行った。P. 279 のコラムでとりあげたヘミングウェイもその一人である。

問3 正解② (外交の歴史) 21

- ① P. 276 の②にあるように、善隣外交とは、ラテンアメリカ諸国を中心に国際的な協調関係を築こうとする政策で、アメリカ合衆国大統領フランクリン＝ローズヴェルトが採用した。カストロは、第二次世界大戦後のキューバ革命を指導した革命家である。カストロやキューバ革命については、P. 307 の③を参照。
- ② P. 308 の①にあるように、西ドイツ首相のブラントは東欧の社会主義圏との関係改善を目的として東方外交を推進した。ブラントは、1971年にノーベル平和賞を受賞している。

- ③ P. 306 の¹にあるように、アイゼンハワーは第 34 代アメリカ大統領である。協調外交とは、ヴェルサイユ条約を着実に履行することによってヨーロッパ諸国の間に協調関係を築こうとする政策で、ルール占領と賠償金問題によって独仏関係が悪化するなか、ドイツの外相シュトレゼマンやフランスの外相ブリアンが中心となって推進した。戦間期のヨーロッパについては、P. 268 の¹などを参照。
- ④ P. 259 の²にあるように、棍棒外交とは、軍事力による威嚇などによって積極的にラテンアメリカに介入しようとする政策で、アメリカ大統領セオドア・ローズヴェルトが推進した。棍棒外交は、①で触れた善隣外交の対極に位置する外交政策である。P. 234 の¹にあるように、マッキンリーは、フィリピン・グアム領有やハワイ併合など、その後のアメリカによる海外進出の端緒を開いた大統領である。

B

リード文にある，第一次世界大戦の講和条約やパリ不戦条約については，P. 266・267 で整理している。ニュルンベルク国際軍事裁判など，第二次世界大戦の戦後処理については，P. 283 を参照。

問 4 正解① (19 世紀末から 20 世紀初頭のヨーロッパにおける国際関係)

22

P. 256 にあるように，ロシアとの再保障条約を破棄し，積極的な世界政策を推進したのは，ドイツ皇帝ヴィルヘルム 2 世である。

これにともない，列強の国際関係はドイツの 3 B 政策とイギリスの 3 C 政策の対立を軸として展開していくこととなる。19 世紀後半から第一次世界大戦にかけての欧米列強の国際関係は，P. 260 の¹に詳しい。

問 5 正解③ (第一次世界大戦の講和条約)

23

① P. 220 の¹にあるように，ライン同盟とは，1806 年に神聖ローマ帝国にかわってナポレオン主導で結成された同盟である。これによって神聖ローマ帝国は名実ともに消滅することとなった。その領域は，P. 221 の地図^Aで確認できる。

② P. 220 の¹にあるように，第 1 回対仏大同盟とは，フランス国王ルイ 16 世処刑を契機として，フランス革命の波及を恐れるヨーロッパ諸国が結成した同盟である。¹では，計 4 回組織されることになる対仏大同盟の結成・消滅の契機が確認できる。

③ P. 266 の²にあるように，第一次世界大戦に敗北したドイツは，ヴェルサイユ条約によって厳しい軍備制限を課された。ヴェルサイユ条約は，ウィルソンの理想主義とフランス外相クレマンソーの対独復讐の産物として理解することができる。条約によるドイツ領の縮小は，P. 266 の地図^Cで確認できるほか，地図^Dには，敗北にともなってドイツが失った海外領土をまとめた。

④ P. 200 にあるように，スイスの独立は三十年戦争の講和条約であるウェストファリア条約によって 1648 年に承認された。ウェストファリア条約では，カルヴァン派の承認，オランダの独立承認など，その他の重要な決定も行われた。また，条約によってドイツ諸侯が領邦君主権を確立したことで，神聖ローマ帝国は有名無実化することとなった。

問 6 正解③ (ニュルンベルク国際軍事裁判) 24

ニュルンベルク国際軍事裁判については、P. 283 の 3 を参照。第二次世界大戦後、1945 年 11 月から 1946 年 10 月にかけて、ニュルンベルクで軍事裁判が行われ、ナチ党指導者が裁かれた。

C

リード文で丁寧に述べられている香港の歴史については、P. 249 の用語解説に詳しい。19 世紀半ばから 20 世紀前半にかけて、欧米列強が清への攻勢を強めていく過程については、P. 248～251 を参照。P. 250 にまとめたように、イギリスはアヘン戦争後の南京条約で香港島を、アロー戦争後の北京条約で九竜半島南部を獲得した。日清戦争での清朝敗北後、列強による進出が激化するなか、イギリスはさらに新界や威海衛の租借を認めさせた。租借地については、P. 249 の地図 **C** で位置も確認しておきたい。

問 7 正解④ (中華人民共和国の対外関係) **25**

一連の流れについては、P. 290 の **2** が重要である。ベトナム戦争からの撤退を望むアメリカと、国境紛争をへて中ソ対立が激化することを危惧した中国の利害が一致し、ニクソン訪中が実現。その流れをふまえ日中国交正常化が成立した。

- a 1972 年の日中共同声明、1978 年の日中平和友好条約は、b・c で示す米中和解を踏まえた動きである。日中国交正常化については、P. 285 の **2** を参照。
- b 1969 年のダマンスキー島事件によって 60 年代以来の中ソ対立が国境紛争にまで発展するなか、中国は米ソ両大国との対立を危険視し、その解消に向けて動きはじめた。中ソ国境紛争については、P. 310 に詳しい。
- c 1969 年に大統領就任を果たしたニクソンにとって喫緊の課題は、財政を圧迫し国内で反対運動が高まりを見せていたベトナム戦争からの撤退であり、その実現のためには北ベトナムを支援する中ソとの和解が不可欠であった。こうして米中の利害が一致し、1972 年のニクソン訪中が実現した。ベトナム戦争については、P. 299 を参照。

問 8 正解④ (1990 年代の出来事) **26**

- ① P. 310 の **1** にあるように、独立国家共同体(C I S)の成立・ソ連の崩壊は 1991 年の出来事である。
- ② 湾岸戦争については P. 301 の **4** を参照。湾岸戦争は、イラクによる 1990 年のクウェート侵攻を契機として、アメリカを中心とする多国籍軍とイラクとの間で起こった国際紛争である。
- ③ P. 297 の **1** にあるように、インドは 1974 年にすでに核実験を成功させていたが、インド・パキスタンが相次いで核実験を行ったのは 1998 年の出来事である。両

国による核実験実施の背景に，中国の脅威や印パ紛争があることを理解したい。
カシミール問題については，同ページの用語解説を参照。

- ④ P. 296 の 1 にあるように，朴正熙は 1960・70 年代にかけての韓国大統領である。
任期中の 1965 年，日韓基本条約が締結された。

問 9 正解① (マカオの歴史) 27

P. 166 の 1 にあるように，明は 1557 年にポルトガル人に対して，中国大陸南岸に位置するマカオの居住権を与えた。1582 年には，マテオ=リッチもマカオを訪れている。P. 210 の 1 では，ポルトガルによる植民活動全体を確認できる。16 世紀，ポルトガルはゴア，マラッカ，マカオと次々にアジアに進出するが，17 世紀に入るとオランダの攻勢が強まり，アジアにおけるポルトガルの影響力は衰退した。

第4問

A

リード文中にある預言者ムハンマドについては、P. 122 を参照しておきたい。イスラーム世界において、コーラン(クルアーン)やハディースの研究に関連する法学や神学は「固有の学問」とされ、古代ギリシアやインドの影響を受けた哲学・医学・数学などの「外来の学問」とは区別された。P. 128 を見て、整理しておきたい。P. 161 の³で触れた 12 世紀ルネサンスとの関係で「外来の学問」に目が行きがちだが、「固有の学問」もイスラーム世界において重要な位置を占める。

問1 正解② (メディナの位置) 28

預言者ムハンマドは多神教徒の多い故郷メッカで迫害を受け、622 年にメッカの北方、紅海東岸から約 140km のメディナに移住した。このムハンマドのメディナ移住はヒジュラと呼ばれ、イスラーム暦紀元元年とされている。P. 122 の地図^Aでメッカとメディナの場所を確認し、年表でも諸事項をおさえない。

問2 正解③ (イスラーム神秘主義) 29

- ① P. 124 下部の表にあるように、ジハードとは聖戦を意味する。P. 123 の地図^Bに見えるイスラーム世界の急速な拡大は征服活動によるものだったが、ポイントで言及しているように、征服地で強制的な改宗が行われることは少なく、ジズヤを納めれば生命と信仰が保証されたことも注意したい。
- ② P. 181 の³にあるように、バクティとは神に対する絶対的な帰依を意味するヒンドゥー教の用語である。このバクティ信仰が、同様に神との一体性を重視するスーフィズムと結合するかたちで、ナーナクによってシク教が創始されたことを理解しよう。
- ③ スーフィズム(イスラーム神秘主義)は、イスラーム法学・神学の形式化を批判し、神との一体化を目指して清貧と禁欲を重視した。P. 125 の用語解説では、スーフィズムがイスラームの布教活動やネットワークの拡大に寄与したことが確認できる。
- ④ シャリーアとはイスラーム法のこと。P. 124 下部の表を確認。犯罪を裁いたり対立を調停したりするだけでなく、生活一般を含む広範な社会秩序を担っている。同じ表で説明されているウラマーが、シャリーアの運用において重要な役割を果

たした。

問3 正解④ (理想化された過去との対話) 30

- a P. 188 の1で、ルネサンス期のヒューマニズムが古典古代の文化への関心に基づくものであることを確認しよう。古典古代という用語は、一般に古代ギリシア・ローマ時代のことを意味する。P. 190 の三美神の描かれ方を見ることで、ルネサンスと古典古代の文化の間に密接な関係が存在することがはっきりと理解できる。
- b P. 110 の1にあるように、王莽は前漢末の政治家である。皇帝を退けて自ら帝位につき、国号を新と改めて周代を理想とする復古政治を行ったが、劉秀(後漢の光武帝)に滅ぼされた。

B

ロシア革命からソ連の発展に至る過程については、P. 264・265 を参照。リード文で言及されている「ドイツとの戦争」は、第二次世界大戦における独ソ戦を指す。これに関しては、P. 280・282 で確認できる。

問 4 正解④ (ロシアの西欧化・近代化) 31

P. 204 にあるように、西欧の技術や制度を導入するなど、積極的に西欧化政策を進めたのはピョートル 1 世である。彼のもとでロシア領は太平洋岸に到達し、ベーリングによる北太平洋探検も実施された。ピョートルは西方進出にも意欲的で、スウェーデンと北方戦争を戦ってバルト海方面に領土を得た。その際の征服地に建設されたのがサンクト=ペテルブルクであり、完成後まもない 1712 年にモスクワから遷都した。

イヴァン 4 世は初めて正式にツァーリの称号を使用した 16 世紀半ばのロシア君主で、恐怖政治をしき雷帝と恐れられた。

問 5 正解① (歴史書とその著者) 32

P. 92 の¹にあるように、リウィウスは『ローマ(建国)史』を著した古代ローマの歴史家である。P. 84 の¹にあるように、トゥキディデスは、『歴史』で史料批判を交えながらペロポネソス戦争を描いた古代ギリシアの歴史家。ペルシア戦争を物語風に記述した、ヘロドトスの『歴史』とともに整理したい。

P. 128 にあるように、イブン=ハルドゥーンは『世界史序説』を著して、諸王朝・文明の興亡を中心に歴史を論じた。彼については、P. 129 の人物コラムも参照してほしい。

問 6 正解① (ドイツの植民地) 33

欧米列強による太平洋の分割については、P. 259 を参照。マーシャル諸島やマリアナ諸島(グアムを除く)などがドイツ領となった。P. 266 の²にあるように、これらドイツ領の一部は第一次世界大戦後の一時期、日本の委任統治領となる。なお 19 世紀から 20 世紀初頭の太平洋分割によって、プエルトリコはアメリカ領、スマトラはオランダ領、タスマニアはイギリス領(オーストラリア領)となった。

C

リード文にあるユダヤ人の歴史については、P. 277 を参照。ユダヤ教の成立については P. 73 にまとめた。第二次世界大戦後のパレスチナ問題やイスラエルの歴史については、P. 302・303 で整理できる。

問 7 正解② (世界史上の迫害や抑圧) 34

- ① P. 94 の¹にあるように、ディオクレティアヌス帝は皇帝崇拜の強化と並行して、キリスト教に対する迫害を行った。しかし、キリスト教の台頭は抑えられず、313 年のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認、392 年のテオドシウス帝によるキリスト教国教化をへて、キリスト教は着実に発展していった。
- ② ルイ 14 世による迫害については、P. 201 を参照。1598 年、アンリ 4 世はナントの王令を発してユグノーに信仰の自由を認め、宗教戦争の混乱を収拾した。ルイ 14 世による 1685 年の同王令廃止は、商工業者の中心を占めていたユグノーの亡命を招き、フランス経済に打撃を与えた。
- ③ アウラングゼーブ帝の統治については、P. 180 の¹と P. 181 の²を参照。3 代皇帝のアクバルが、非ムスリムに対するジズヤを廃止し、異教徒間の融和を目指すことで帝国を安定させたのに対し、6 代皇帝アウラングゼーブは、ジズヤを復活するなどイスラーム法の厳格な適用を行い、非ムスリムの反発・離反を招いた。
- ④ P. 74 の¹や P. 277 の¹にあるように、新バビロニアのネブカドネザル 2 世は、ヘブライ人のユダ王国を滅ぼし、彼らを首都バビロンに連行した。

問 8 正解② (第二次世界大戦中のフランス) 35

P. 280 の地図^Aや²にあるように、ドイツにパリを占領されたフランスでは、南仏に対独協力政府であるヴィシー政権が成立する一方、レジスタンスと呼ばれる抵抗運動も根強く続いた。P. 280 の用語解説にあるように、軍人ド=ゴールは、ロンドンに亡命政権を樹立してドイツに抵抗した。後にフランス大統領となった彼は、1966 年に N A T O を脱退するなど、アメリカと距離を置いて独自路線の政策を展開した。

なお、P. 280 の²にあるように、ペタンは第二次世界大戦中のヴィシー政府の首班である。南仏の都市アヴィニョンは、14 世紀の教皇のバビロン捕囚で有名。P. 146 にはアヴィニョン教皇庁の写真も掲載されている。

問 9 正解③ (パリ=コミュニーの成立年代) 36

P. 227 の⁷にあるように、パリ=コミューンとは、パリの人々がプロイセン=フランス戦争敗北にともなうドイツとの講和に反対し、樹立を宣言した自治政府である。戦争後に成立した臨時政府は、ドイツ軍の協力を得て、この動きを鎮圧した。同ページのコラムでは、パリ=コミューンの崩壊とパリの都市改造の関係にも触れている。